

# 品詞転換の解釈プロセスと関連性理論\*

渋 沢 優 介

## 1. はじめに

英語が他の言語に比べ、極めて多くの語彙を持つようになった要因として、外来語への容認度が非常に高く、柔軟で、造語力のある言語であるということが挙げられる。英語は長い歴史の中で、他言語から多くの語彙を取り入れながら今日の姿を築いてきた。

また、英語は語形成能力に優れた言語であり、語形成の発達が英語の語彙、表現をより豊かなものにしてきたといえる。語形成とは、さまざまな方法で新しい語を作り出す方法であるが、一般に、既存の語に接辞（接頭辞や接尾辞）を付加させて新語を作る①派生（derivation）、②逆成（back-formation）および、③転換（conversion）は頻度も高く、その他にも④複合（compounding）、⑤短縮（shortening）、⑥混成（blending）および⑦語根創造（root-creation）などが挙げられる。

英語では、同一の語が複数の品詞として用いられることがあり、語の形態はそのままだ、品詞のみを変えることを品詞転換、またはゼロの接辞が付加されたと考えて、ゼロ派生とも呼ぶ。古英語期、中英語期の時代では、ゲルマン語本来の屈折言語としての特性が強く、高度で複雑な屈折によって文法標識を示していた。

ところが、時代の推移とともに語尾変化の簡略化が進み、近代英語期では、かつてのような複雑な語尾変化はほとんど見られなくなり、この時代

---

\* 本稿は第22回年次大会（2012年3月3日、於：亜細亜大学）での研究発表内容の一部に加筆・修正を施したものである。

を *lost inflection* の時代とも呼ぶ。

品詞転換とは、近代英語の特徴のひとつであり、屈折が消失した結果生まれた文法事象であるといえる。特に、品詞転換、いわゆるゼロ派生が英語の表現をより豊かなものに行っていると考えられる。

本稿では、英字新聞の *headline* に用いられている名詞由来動詞を分析し、本来、名詞である語を動詞として解釈する際、読み手は、関連性理論における知見——具体的には、人間の認知傾向を表す関連性第1原理、意図明示コミュニケーションを表す関連性第2原理——を応用し、推論能力によって適切な解釈を可能に行っていると主張する。

## 2. 意図の明示、非明示とコミュニケーションモデル

本稿の目的は、*headline* に用いられた名詞由来動詞の解釈プロセスを、関連性理論の知見を応用し、明示することである。

言語学において、意味論が対象とするのは、言語内の意味であるのに対して、言語外の意味を対象とするのが語用論だということができる。関連性理論は、人間の認知傾向と、ことばとの関係を研究する認知語用論のひとつであり、その理論を科学的に証明することを目指し、発話がいかに解釈されるのかということをも明らかにしようとする理論である。

### (1) What time is it now?

この(1)の文の意味を考えてみよう。教師が学生に対して言ったと仮定する。教師が、いつも持っているはずの時計を忘れ、学生に時間を尋ねていると単純に解釈することもできる。しかし、実際に教師が(1)の文を口にした時に意図したことは、再三の注意にも関わらず遅刻を繰り返す学生への警告であるかもしれないし、事実上の落第通告であるかもしれない。

つまり、“What time is it now?” が実際の発話として考える場合、下記の2つのレベルが考えられる。

### (2) 単に時間を尋ねている

## (3) 遅刻した学生への警告・落第通告

一般に(2)を「字義通りの意味」、(3)を「発話の意図」と考える。(1)を聞いて(3)のような意図された意味を得るためには、コンテキストや状況に合わせて適切に解釈する能力を要する。

語用論におけるひとつの目的は、受信側(聞き手)が、どのようにして文の意味と、送信側(話し手)の意味の間にあるギャップを埋めて解釈を行うのかを解明することにある。

文の意味とは、コンテキストが関与しない文法によって決定される意味を指す。一方、送信側による、話し手の意味とは、コンテキストが関与し、明示的、または非明示的に伝えようと明らかに意図した意味を指す。文の意味と話し手の意味を適切に解釈するためには以下の要素を考える必要がある。

- (4) a. 発信者は何を明示的に伝達しようと意図していたのか
- b. 発信者は何を非明示的に伝達しようと意図していたのか
- c. 適切な解釈をするためにコンテキストを考慮に入れる

コミュニケーションがどのように行われているかを説明する方法として、コードモデル (code model) と呼ばれるものがある。このモデルにおける考え方では、あるメッセージを伝えようとする発信側が、そのメッセージに関連する信号をコード化 (encode) 発信し、受信側が、その信号を読解 (decode) するというプロセスを経て情報伝達がなされる。

このモデルでは、同一のコードを持った送信者と受信者が正常に機能し、信号が消滅する、伝達が妨害されるなどの条件が課されないかぎり、コミュニケーションは常に成功すると保証されている。

しかし、現実的には、送信側と受信側が全く同一のコードを持ち合わせている状況は考えにくく、個人差があることが当然である。もし、コードモデルのみが、人間のコミュニケーションを説明する方法であるとすれば、送信側の意図が全て言語化され、受信側はその意味を解釈することになる。

人間はお互いの意図を推測によって認識する力を持ち合わせており、送

信側の意図的な内容を適切に解釈するには、推論 (inference) という作業が大きな役割を果たす。この推論をコミュニケーションモデルに導入したのが、哲学者 Paul Grice である。

このモデルの目的は、どのようにして受信側が、発信側の意味として適切な仮説を認識するかという点にある。

本稿のテーマに照らし合わせると、英語の語彙は、複数の品詞に用いられ、語レベルにおいても妥当な意味を解釈する必要がある。Grice によると、ここでいう妥当ということばの意味は、発信側が目指している期待を満たすことで、受信側にとっては守ろうと努めている基準にかなうものである。

Grice の基本的な前提は、コミュニケーションがただ単に目的を持った合理的な行動であるというだけでなく、協調的な行動でもあるということである。1960年代、Grice は、字義通りの意味に対して、コンテキストで生ずる意味を会話推意 (Conversational Implicature) と名づけ、いわゆる協調の原理 (Co-operative Principle)<sup>1</sup>として公式化した。さらに、この協調の原理を基盤に、会話の公理 (Maxims)<sup>2</sup>を提案し、この公理を順守したり違反したりすることで推意を導くことができたとした。

Grice によるこの理論は、革新的で会話の推意を研究する語用論の発展に大きく影響を及ぼし、協調の原理という名称からも明確なように、コミュニケーションをみんなで協力して行う作業に似ていると考えた。つまり、参加者が共通の目的 (コミュニケーションを成功させる) に向かう協調的な行動であると考えている。

また、Grice が主張していることは、意図的に協調の原理、公理を破ることも可能であるため、すべての会話が実際に協調的であり、常に公理を順守しているわけではないとしている。

### 3. 関連性理論の原理—関連性理論における関連とは何か

関連性理論は、Grice とは異なる立場をとっている。誰かと会話するということは、相手に情報を提供することであると考えている。Dan Sperber と Deirdre Wilson によって提案された関連性理論の目標は、情報の受信側がどのようにして発信側の伝えようとした内容を理解するのかに

ついでにメカニズムの解明であるといえる。

Griceの理論が、協調の原理、会話の公理を中心に据え、会話は共同作業であるという立場をとるのに対して、関連性理論は、受信側に重きを置いた理論であるといえる。関連性理論は、Griceによる推論的なコミュニケーションモデルにおいて提示された問題点を解決しようとする試みを出発点に、語用論を認知的な方向へと発展させた。

関連性理論における、「関連がある」という意味を理解するために、本節では関連性理論の基本原則について述べる。

### 3.1. 関連性理論でのコミュニケーションに関する想定

関連性理論は、次に挙げる想定に基づいている。

- (5) a. すべての発話には、複合化された文の意味と矛盾しない、言語的に可能な解釈が数多くある。
- b. しかし、具体的な状況下では、これらすべての解釈が、同等に接近可能（等しく聞き手の頭に浮かぶ）なわけではない。
- c. 聞き手は、それらの解釈に妥当性を評価し、話し手の意味の解釈として受け入れるか排除するかを決める単一の、非常に一般的な基準を持っている。
- d. この基準は、1つの解釈（または2、3のそれに酷似した解釈）を選び、それ以外の解釈を排除するほど十分に強いものなので、聞き手は、その基準に合致する、最初に思い浮かんだ解釈こそが、選ぶべき最終的な解釈であると見なしてよい。

これらの想定には、いくつか補足をする必要がある。まず、発話の解釈とは意図された解釈、つまり送信側の意味を指す。送信側が受信側に復元してもらいたいと思っている解釈は、受信が復元できるように考慮されている。

言い換えると、送信側は自分の発話において意図した解釈が相手に適切な形で伝達されるようにしている。

次に補足する点は、解釈という用語が、明示的意味、非明示的意味、コンテキストをも含む広い意味で用いているということである。また、コ

コミュニケーションには、誤解が起こる場合もあり得るということである。どのように発信側と受信側のギャップを埋めるのかということが語用論の目的のひとつであり、誤解が生ずるプロセスもまた、語用論の目指す目的であるということが出来る。誤解は、相手の意図した意味を解釈する際に不都合が生じ、常に相手の意図した意味を導くとはかぎらないということを示している。

人間は誰しも頭の中に多くの想定を持っている。「知識 (knowledge)」という語を使わない理由は、想定の中には不確実なものや、誤りが含まれている可能性があるからである。人は常に、自分の持つ非常に多くの情報を思い浮かべているわけではなく、時と場合、コンテキストに応じて必要な情報を取捨選択し、適切な認知環境を整えたいうえで、伝達内容の理解に臨む。

Sperber and Wilson (1995<sup>2</sup>) がその著書 *Relevance* で述べていることは、可能な解釈を評価する基準は、人間の認知に関する基本的な想定に基づいており、その想定とは人間は常に関連性を求める存在であるというものである。

すなわち、人間の認知システムは、知覚、記憶、推論とも自分にとって潜在的に関連性のある情報を取り出すように働く性格を持っている。

また、発話以外から得られる情報も、関連性を持ちうる。例えば、帰宅途中で交通事故を目撃したとする。この交通事故による視覚情報は、目撃者にとって関連性のある情報ということができる。

関連性の概念は、単に発話によって伝達された情報のみならず、Sperber and Wilson は、例えば知覚、記憶、推論といったあらゆる情報源から得られるとしており、より形式的にいえば、関連性は、認知的な処理過程へのインプットとなる外的な刺激（見るもの、聞こえるもの、発話、行動）、または内的な表示（思考、記憶、推論から得られる結論）が持つ、潜在的な特性であると定義している。

関連性理論でいうところの、「関連がある情報」とは、受信側が持ち備えているすべての情報であるが、「受信側が、伝達内容を理解する際に、認知環境に思い浮かぶ情報」ということができる。関連性理論では、新情報（新たに提示された情報）が、コンテキストと相互作用することで認知効果を持つ場合に、当のコンテキストにおいて関連性があるとする。

そして、人間は自分の持つ想定を増やし、不確実な想定は確実なものへ、誤った想定は正しい想定にとって替わることを常に願っている存在なのである。

ある人が、頭の中に思い浮かべることの想定 of 総和を認知環境とすれば、われわれは、認知環境が改善されることを常に願っている存在であるといえる。

### 3.2. 認知効果

次に、認知効果とは、あるコンテキストにおいて情報処理をする際、当の情報によって認知環境に変化が起こることである。認知効果には次の3つがあるとされている。

- (6) a. 不確かなコンテキストを確定化（強化）する場合
- b. 既存のコンテキスト的想定と矛盾し、誤った想定を放棄する場合
- c. 既存のコンテキスト的想定と結びつき、コンテキスト的含意を引き出す場合

（東森・吉村（2003）参照）

新情報と既存の想定による相互作用から生ずる認知効果には、①強化、②放棄、③コンテキスト含意の3つがあり、それぞれの効果の大きさに関連性の度合いは比例する。

### 3.3. 処理コスト

関連性理論が、ほかの語用論とは異なっている点は、発話解釈を認知的な問題としてとらえているところである。つまり、社会的要素・言語的要素に加えて処理コスト（processing effort）といった認知的要因も、発話解釈に影響を与えている。

処理コストとは、受信側が情報を解釈するうえで要する労力のことで、情報を解釈する際の労力にも関連性に関わる。Sperber and Wilson は、処理コストについて次の項目に分類している。

- (7) a. 最近使われたかどうか：より最近に使われた語、概念、音声、統語

構造、コンテキスト的想定で、これらが用いられていれば、必要とされる処理コストは少なくなる。

- b. 頻繁に使われるかどうか：より頻繁に使われる語、概念、音声、統語構造、コンテキスト的想定で、これらが用いられていれば、必要とされる処理コストは少なくなる。
- c. 言語的複雑性：より複雑な語、概念、音声、統語構造、音声構造が用いられていれば、必要とされる処理コストは大きくなる。
- d. 論理的複雑性：否定語を含む表現、否定表現は肯定表現に比べて処理コストがかかる。

(今井 (2009) 参照)

headlineにおいて、きれいに印刷がされている文字と、印刷機の不具合でところどころインクがかすれている文字とを比較した場合、両者の情報にはまったく同じ認知効果がある。しかし、処理コストの面ではそれぞれ異なる。

つまり、まったく同じ情報が伝えられていたとしても、伝え方次第では当の情報を解釈することが容易にも困難にもなる。

一般的に言えば、どのような情報にも、知覚的に目立つかどうか、読みやすいかどうか、言語的・論理的に複雑かどうかなどが個々の認知システムに異なる処理コストをかけることになる。

### 3.4. 認知効果、処理コスト、関連性の関係

関連性の評価には、認知効果とその認知効果を得るために必要とされる処理コストの2要素が関わっており、認知効果と関連性は比例の関係にある一方で、処理コストの面では、反比例の関係にある。認知効果、処理コスト、関連性の関係は次のようにまとめることができる。

- (8) a. ほかの条件が同じであれば、(ある情報を処理する人にとってその情報の) 認知効果が高ければ高いほど、(その時点でその人にとって) 関連性は高くなる。
- b. ほかの条件が同じであれば、処理コストが低ければ低いほど、(その時点でその人にとってその情報の) 関連性は高くなる。



一般に人は、関連性の度合いが最大になるような情報を求める存在であるので、送信側は受信側の関連性が高まるような工夫を凝らす。headline に関して言えば、同じ内容を伝達する場合でも、視覚的イメージ性を持ちやすい名詞を動詞として使うことで送信側は、読者の意識を惹くために、関連性の持つ外的な刺激（視覚）と内的な刺激（思考、推論）の両者に働きかけている。

認知言語学における Langacker の文法理論では品詞を、①モノ的な認知を表す品詞、②関係的な認知を表す品詞に二分している（Langacker (2008) 参照）。

名詞は前者に、動詞は後者に分類され、役割、機能の点でも異なる。本来、名詞は、動詞の属する関係的な認知を表す品詞には分類されないが、視覚的イメージを持つ。

本来、動詞の役割である情報伝達を、視覚的イメージ性を持つ名詞に担わせる（名詞由来動詞の使用）ことで、受信側に外的な刺激（視覚）と内的な刺激（思考、推論）の両者から働きかけることができる。あえて普段とは違う役割、機能を担わせることで読者の意識を惹きつけ、関連性を高める効果が期待できる。

送信側の発話の意図（非明示的意図）を、適切に解釈するためにはコンテキストや状況に応じた推論が大きく関与している。Sperber and Wilson はコンテキストを、発話場面において活性化される想定集団であると考えており、人間は、意識的、無意識的に関わらず自動的に可能なかぎり、最も効率的な情報処理を目指す存在である（認知原理第1原理）。

#### 4. headline の特徴と関連性

headline 自体においても、知覚的に目立つか、読みやすいか（字体や文字の大きさ）、言語的・論理的に複雑かどうかなどの要素が、読み手の意識を惹く因子として考えられる。

一般に、テレビやラジオ、新聞などの場合、不特定多数の視聴者、読者を対象としているため、関連性の度合いを高めるために社会的要素の強い流行語などを使うのもひとつの手段である。しかし、このような語、表現は一過性のもので一部の、特定の年代層には有効であるが、実際、多くの

人の関連性を高めるには適していないように思える。

関連性理論における「関連」とは、受信側の認知環境に変化が起きることであり、関連性の有無は、認知効果の有無であるといえる。限られたスペースで、効率よく記事の内容を伝えるという **headline** の特徴を考えると、名詞由来動詞の使用は、関連性を高める工夫のひとつであると考えられる。

英字新聞の **headline** の特徴として、インパクトのある表題をつけようとする結果、特有の表現が生まれた。しかし、実際に **headline** でよく用いられる語（時事英語で一般にいう「見出し用語」）という決まった語があるわけではなく、**headline** には書式、読者の意識を惹くためにインパクトを持たせるなどといった理由から、特徴的な語彙の選択傾向があり、それを一般に「見出し用語」と呼んでいる。

その特徴としては、たいてい一音節で短い、比喩的用法が中心であることが挙げられる。たとえば、**air** 〈日常：〈大気に触れさせる〉〉、〈新聞：〈公表する〉〉が挙げられる。これも上述の **headline** 英語の諸特徴と同列に受け取ることができる。また、身体部位名詞、生活語彙名詞が多く用いられている。本稿では、要点を絞るために身体部位名詞、生活語彙名詞を主眼的に扱う。以下、本節では5つの例を考察してみたい。

(9) **eye** 目論む、追求する：

Ishiba **eyes** role in Sudan for SDF

この記事は、石破大臣（当時）が、自衛隊派遣を検討しているという内容であるが、「検討する」「目論む」という表現に **plane**, **scheme**, **aim**, **design**, **intend** のような語ではなく、**eye** という身体名詞を選択している。これには、名詞には視覚的イメージ性があり、具体的なイメージを持ちやすいという点（外的刺激）、また、**eye** の機能、役割から思考、推論を働かせて「目論む」、「意図する」などコンテキストに適した意味を導きだす（内的刺激）といった二重の原理が働き、読者の意識を惹きつけていると考えられる。

(10) **head** 先頭に立つ、率いる：

DPJ lawmaker to **head** Upper House

この *headline* の解釈においても、*head* の位置関係からも体の上部に位置していること、機能、役割から「(ものごとを) 考える」、「先頭に立つ」、「率いる」といった意味を内的刺激、外的刺激の両者を通して導き出すことが可能であろう。

(11) *face* 直面する：

- a. Tokyo governor must *face* the opposition
- b. Lay judges *face* first demand for death
- c. Kan may *face* Ozawa-linked challenge
- d. Nagoya assembly *faces* recall referendum

これらの記事の解釈においても、顔の位置から何かに（真正面から）直面する、受け止めるなどの意味を導き出すことが可能であろう。

この他にも、*hand/mouth/nose/shoulder/foot/elbow* などの身体部位名詞が、動詞化されるケースが多い。それぞれ、「手渡す」、「ささやく、口を動かす」、「(においを) 嗅ぐ」、「かつぐ」、「踏む」、「肘でつく」などの解釈が推論から導くことが可能であろう。

また、生活道具等の生活語彙も、数多く動詞化され、*headline* にも多用される。

(12) *hammer* ハンマーで叩く：

Hatoyama *hammers* Fukuda in Diet

ここでは、生活道具であるハンマーを、戦いに使う特殊な道具にみ立てて、その口論の激しさをイメージさせている。

(13) *ax* 斧で切る：

- a. Hatoyama *axes* deadline on Futenma
- b. Nissan to *ax* 20,000. Log/180 bil. Loss
- c. Ex-Fujitsu chief Nozoe *axed* as adviser

本来、木を伐採するための道具であるが、斧を木に入れるときの激し

さ、勢いの強さも同時に伝達していると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、英字新聞の **headline** に用いられる名詞由来動詞を分析し、名詞を動詞として解釈する際、読み手は、関連性理論における知見、原理を応用し、推論能力が適切な解釈を可能にするということが妥当であると論じてきた。

まず、英字新聞では限られたスペースに、読者の意識を惹きつけるような **headline** をつけようとする結果、名詞由来動詞を多用する傾向にあることを指摘した。次に、**headline** に用いられる名詞由来動詞の特徴として、(i)たいてい一音節で短いこと、(ii)比喩的用法が中心であること、(iii)身体部位名詞、道具名詞（生活語彙名詞）、その他日常生活と関連がある名詞が多用される傾向にある、といったことを挙げて、解釈のプロセスを関連性理論の知見を応用して分析した。

身体部位名詞や生活語彙名詞が多用されているのは、新聞のように、不特定多数の読者が見込まれる場合、なるべく多くの読者の認知環境に基準を設定する必要があるからであろう。

読者は、名詞由来動詞を解釈する際、当の名詞の持つ機能、役割・コンテクスト的想定から転換後の意味を推論する。視覚的イメージ性の強い名詞に、情報伝達の役割を課したほうが具体的イメージを持ちやすいのと同時に、読者の意識を惹きつけ、関連性を高める効果が期待できる。

関連性には、認知効果、処理コストの2要素が強い結びつきをなしているが、特に①最近使われたかどうか、②頻繁に使われたかどうかの2要素が大きく関係していると考えられる。

関連性理論における人間の認知にかかわる基本的な考えは、「人間は意識しているといないにかかわらず、自動的に可能なかぎり最も効率的な情報処理を目指す」というものである。この傾向を表したのが関連性の第1原理、認知原理である。第2原理は、意図明示的コミュニケーションの原理を表す。以下を参照されたい。

(14) 関連性の原理 I（認知的関連性の原理 <Cognitive Principle of

Relevance>) :

Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(人間の認知は、関連性を最大にするように働く特性を持つ)

(Sperber and Wilson (1995<sup>2</sup>) 参照)

(15) 関連性の原理Ⅱ (伝達の関連性の原理 <Communicative principle of relevance>) :

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(すべての顕示的伝達行為は、それ自体が最適な関連性を持つことを受信側に生じさせる) (ibid.)

関連を持つということは、不必要なコストを払うことなしに、できるだけ多くの認知環境の改善をもたらすことである。つまり、関連性は、認知効果の大きさ (認知環境の改善の度合い)、認知効果を受けるために必要なコストのバランスの上に成り立っている。

関連性を高めるためには、処理コストが低くなるような伝達の手法をとるのが一般である。ところが、**headline**の場合、名詞由来動詞を用いて、通常とは異なる意味を課すので認知効果は高まるが、処理コストに関していうとコストは高くなる。それにもかかわらず、読者が品詞転換後の意味を適切に解釈できるのは、関連性の第1原理である認知原理、第2原理である意図明示的コミュニケーション原理、顕示的伝達 (ostensive communication) の原理が働いているからであると考えられる。

顕示的伝達とは、送信側の「あなた方に関連のある情報を伝えるので注目してください」という意思表示である。言い換えると、「これからあなた方の関連性の度合いを高めます」ということを受信側に伝えていることになる。これを受けて、受信側は、関連性の第1原理、第2原理に基づいて推論を行う。こうして適切な解釈が導かれるのである。

なお、品詞転換はメタファーに動機付けられているという立場に立てば、隣接性に基づく推論の分析も可能である。今後の課題として、メタファーの視点から分析も試みたいと考えている。

## 注

1. 会話というものは、参加者の協調の上に成り立っているものであるから、会話への参加者はこの原則を心得ておかねばならず、またこれを（会話への参加を放棄しないかぎり）順守しているという主張。

根底には、会話における自分の貢献を、それが生ずる時点において、自分が参加している会話のやりとりの中で合意されている目的や方向性から要求されるようなものにせよという原理がある。

2. 協調の原理を支えるものとして4つの公理 (Maxims) が立てられる。
  - (ア) 量の公理 (maxim of quantity) : 自分の貢献を、要求されている分量にすること。要求以上であっても以下であってもいけない。
  - (イ) 質の公理 (maxim of quality) : 真でないことを自分が知っていることや、真であるという証拠を持たないことを言うてはならない。
  - (ウ) 関連の公理 (maxim of relation) : 関連性のあることを言え。
  - (エ) 様態の公理 (maxim of manner) : 明瞭で、簡潔で、順序立った話し方をせよ。

これらの公理はそれぞれ情報量の公理 (maxim of informativeness)、真実性の公理 (maxim of truthfulness)、関連性の公理 (maxim of relevance)、明快性の公理 (maxim of clarity) と呼ばれることもある。

## 参考文献

- 東森 勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開』(英語学モノグラフシリーズ 21) 東京: 研究社.
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』 東京: 大修館書店.
- 今井邦彦 (編) (2009) 『最新語用論入門 12章』 東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar—A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Marchand, Hans (1960) *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. München: Verlag C. H. Beck.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995<sup>2</sup>) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (D. スペルベル、D. ウィルソン著、内田聖二他訳 (1999) 『関連性理論—伝達と認知』(第2版) 東京: 研究社.)
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開』(英語学モノグラフシリーズ 20) 東京: 研究社.